

教養講座

日本語といるもの (第一回)

— 国語観 —

藤原与一

1

はじめ

「国語教育は、みんないっしょうけんめいやっているのだけども、なかなか進まない。」と言われています。どの道にあっても、まじめな努力の中では、このようななげき、かならずおこるものでしょう。国語教育においても、このなげきは、あってよい大切な反省だと思われれます。

「なかなか進まない」根源の理由はどこにあるのでしょうか。国語をはっきりつかんでいないからだ。というのがある人たちのしずかな意見のようです。私もこの意見に賛成です。——国語教育は国語の教育です。国語教育のために「国語」がしっかりとつかまえていなくてはなりません。

ここに、国語教育のための国語（日本語）講座が、一定の意義を持つと考えられるのであります。

国語観という問題

ところで、国語の全体をしっかりとつかまえることは、容易ではありません。とすれば、全体をしっかりとつかまえてから国語教育をやるといふようなことは、言ってもむりであることが明らかであります。私どもは、たとえ国語をとらえることは不完全であっても、毎日、国語教育をしなくてはならないのです。

ここで、国語観ということが問題になります。国語観ができてくれば、ものは実際にその全体を把握していなくても、一個の見識で、十分にしごとができる。能率も上げていくことができると言えるでしょう。国語観とは、「国語というものをこのように考える」という考えかたです。何か一つの事

実についてでもよいのです。そのことを、よく見詰め、しっかりとらえて、〃国語とはこんなものか。〃と考えた時、これが国語の見かた、考えかた、つまり国語観というものになります。もとより、国語の全体的な把握ができてはじめて、りっぱな国語観もうまれることでしょう。が、全体をとらえることはできなくても、人は、心がけようしだいではその時の段階なりに、〃国語とはこんなものだ。〃との見識を持つことができると思います。

ごくおしつめて言えば、国語というものを、すなわちわれわれの日本語を、よくとらえようと思ふ心が、すでに国語観になると思ふのであります。へいぜい、私どもは、国語教育にしたがいつつも、肝心の国語にむとんちゃくであることが少くありません。ばくせんと国語を考えたままで、あるいは、何か總体的な印象として国語というものをうけとったままで、国語教育を云々しがちです。言いかえれば、国語をとらえるということなどは考えないで「国語」と言えはもうわかりきったもののように思ひすこしがちです。けれども、実際にどれだけわかっているかとなりますと、組織的な説明それも、うけうりではない自分自身の説明は、そう多くはなし得ないのがつねであります。国語は、存外、とらえ得ていません。そして、とらえることに無関心です。ですから、たしかに「とらえようとすむ心」（思ふ心）が身についたら、

もうそうとうによいことだと思ふのであります。

今日、国語教育界の様子を全般的にながめてみますと、活気があるようで活気がなく、何だか精彩を欠くように思われます。ものが、ある程度の淺さにとどまっており、人は、しらずしらず、それで満足しているかのようです。一方ではまた、そういう現状になやむ人々も少くないありますが、その人々がまた、打ち破りがたい壁の前に、たたずんでいるかのようなおもむきです。一口に言えば、おたがいの考えかたがかたくなり、柔軟さを失い、機械化してきているようです。これを打破するものは、私どもの、みずから進んでとらえるべき新鮮な国語観以外にないような気がします。

国語の学問研究も、この国語観によっておし進められますが、国語教育もまた、この国語観の確立によって、根本から着実に、進めていくことができると思ひます。

ここで、私は私なりに、国語観を述べてみなくてはならぬくなりました。

生活語

私は、国語を見ようとして、もっぱら、生きた国語というものを考えてきました。そして、生きた国語を、確実にとらえようと心がけてきたのであります。この結果、ねらったものは「方言」だったのです。地方々々の言語生活のまとまつたすがた、すなわち方言、これに、私は、生きた国語の現実

を見たのであります。ついに、私の国語研究は、方言研究という方法の国語研究になったのであります。

こうして、方言に、生きた国語を見るようになりますと、国語が、まことに、生活のことばであることを、痛感するようになりしました。ここで「方言」を、「生活語」とよびかえたのであります。私は、生活語観といったような国語観を持つにいたつたしだいであります。

考えてみますと、共通語だって、自分の身にとっての生活語です。私も、大いに、共通語を生活化しなくてはなりません。自分のよい生活語にしないでほなりません。記録のための文章語も生活語です。けっきょくは、自分の生活に関するいっさいのことばは、郷里の土語から文化一般に関することばまで、みな、あい寄って、自分の生活語体系をなしています。

このように、自分にとっての国語のすべては、自分のための生活語と考えられます。私の考では、このように、国語を自分の身のうへの生活のことばと考えることが、今日、もっとも大切なのではないかと思つてあります。

先日、バスに乗っていましたら、ちょうど日曜日だったので、子づれの若夫婦が二組、郊外散歩のしたくで乗ってきました。おりあしく、こみあつていたので。一人の青年が、立つて席をゆずりました。その時、一方の若い母おやは、つ

ぎのように言ったのでした。クニちゃん。ここがあいたよ。早くきなさい。〃さてさて「あいた」のでしょうか。「あけてもらった」のではないのでしょうか。しかし、この時のこの母としては、幼いクニちゃんをすわらせたい一心があるばかり、母の生活のまめ心としては、とりあえず「あいたよ」とさげばざるを得なかつたのでしよう。それはその生活の自然であつたと思つたのであります。と同時にまた、周囲の者が、〃あけてもらったのだ。〃と見ることも、その場と共に生活した者としては、当然の感情と判断であつたと言ふことができましよう。ともかく、言つた者も聞いた者も、みな、ことばを生活しています。そして、この生活の連続が、国語の毎日です。もっともなまなましい国語と言えば、毎日のこの現実のことばでしよう。そう考えると、生活語という考えかたの重要さが、よくわかつてきます。

国語教育の国語は、国語学者にきくよりも、むしろ、私も、おたがいの生活の中で、正しく見つけるべきものである。すくなくとも、生活の中で国語をとらえようとする態度を、私どもの国語観とすることが肝要であります。

2

よくしていく

国語は私どもの生活語であるとすれば、私どもは、生活の

ために、国語をよくしていくことを考えなくてはなりません。ありきたりのままとり守って、国語をうごかすまいとするのは、ゆとりのない国語観です。いったい言語は、時の流れとともに流動するものであります。日本語も、奈良時代のころからこのかたを考えてみても、だいぶん、流動変遷してきました。

もとより、大すじのところは不動です。国語の根本的組織というものは、発音上のことにしても、文法上のことにしても、そんなにうごいてはいません。だからこそ、日本語は日本語として、ちゃんとあるわけです。変動面を見ましても、日本語は、英語などにくらべると、歴史上の変遷が、より少いかのようです。それにしても、変動のあったことは事実であり、ことに、一々の単語ないしは語彙の面になりますと、これは時の生活によく即してまいりますから、日本語も、上代以来、そうとうの変化推移をとってきました。

生活の進展とともに、文化の進歩とともに、時代に応じて、国語は伸びていくべきものです。生活の進歩発達とともに、国語は、伸びさせていくべきものです。ことに今日のように、世界的視野というものが、私どもの日常の生活の当然のひろがりとしてひらけており、世界人類の文明と幸福への寄与ということが私どもの使命として明らかである時、私どもの国語の生活を、時世に応じて、よりよくしていかなくて

はならぬことは明白です。身のまわりの、日常卑近な国語生活を考えてみても、国語を十分に利用するために、これの改善をはからねばならぬことが明らかであります。

国語生活の改善のために、今日、合理性を重んずべきことは、もはや異論もありません。世界性・国際性ということは大切であり、それゆえ、合理とか、論理的にかいいうことは、大切になってきます。

それかといって、国語の歴史を忘れ、伝統をうちすててしまふことなどは、もとよりとりません。国語の本質は十分に生かしつつ、その精神のもとで、できるだけ、新しい開拓をはかるようにしたらよいと思います。表現法、もののいいかたの一つを例にとりましても、たとえば、センテンスの名詞止めということがありますが、このことは、本来の国語生活においても、おこなわれてきたものであります。ところで、今日のつよい要求としては、表現を明確にということがあります。さて、名詞止めの方法は、表現の明晰に役だつ一つの顕著なものです。そこで、歴史的なこの名詞止めの方法を、今は、新時代の表現法のために、ひらきなあってとりあげてみたらと思うのであります。——大いにこれを利用してみて、新しい意気ごみで、自由な名詞止めをやってみたらよろうと思うのであります。

どのような「よくしていく」ことも、内へのみかたと外へ

のみかたとの調和のうえでやることが肝要であります。

身から考える

生活語として国語を考えるのだったら、これをよくしていくのにも、一に、身から、身のまわりからよくしていかななくてはならないことが、めいりょうであります。国語を考える考えかたとしては、つねに「身から」、「身のまわりから」と考えていくことが、もっとも大事であります。

けつして大きいことを考えないのであります。むやみに、りくつにはしらぬのであります。身のうえ、身のまわり、眼前、脚下のことから、こつこつと考えていきます。これが、まさに現実在即した国語把握です。一つの断片的な事実にも国語を見るときは、このような現実注視をいいます。

現実のきびしさが身にしみるようになればよいのだと思います。国語に、あらためておどろくというようになればよいのだと思います。しかもそのおどろきを、一片の感傷などにはしないで、実証していくことが大切です。近代人としての理知をもって、そのおどろきをかみしめ、分析し、玩味すれば、きつと新しい批評意識をうむことができます。これが自分の国語観になります。

人の説のうけとりかた

人さまざまに国語をみています。そして意見を述べています。国文法の説明などになりますと、とまどうばかりに諸説

紛々でさえあります。が、このような、人の意見の相違は、こだわらないで、ゆとりをもってながめ得るようになりたいものであります。説が定まらなくてこまるということもありますが、一方からいえば、いろいろの説があるのでおもしろいということも、ありはしないでしょうか。

帰するところは自分です。しよせん、自分が中心になります。諸説は、自分をやしなう滋養分だと考えればよいことでしょう。滋養分は、多いほどよいはずです。

自分を立てようとの自覚のもとに、人の一つの説によることは、よいことだと思えます。

我執は不可。対極を容れての穏当な自己に生きることが望ましく、そこに、すぐれた国語観が立つと思えます。

(三〇・六・一三)

